



葛谷栄一の
異見私見

新しい年を迎えたが、2020年は歐米では年末にワクチン接種が開始されたとはいえ、一方で変異種が猛威を振るい始めるなど、コロナの影響は長期化・恒常化しそうな気配だ。暮らしや経済等への影響が一段と深刻の度を増し加えていくことが懸念される

コロナについてはさまざまな論評が飛び交っているが、本質的には感染症対策として3密回避が絶対要件となる中で、都市化するこ

な問題が顕在化・深刻化した一年でもあつた。

最大の増大した。そもそもコト、今、貴を聞くう。

価値を置いてきて、
の限界をいみじ
ロナがさらけ出
ているように聞
るのはソーシャ
スタンスを保

地域で地域資源を活用しての循環を膨らましていくことが求められている。

の
はいえ「コナによる日
爾に対応して、すべての
の國民が農的樂しみを
享受できるようににして
いくためには農業のの
り方の見直しが避けら
れない。
農業見直しについて
の要点を掲げれば①
ライフスタイルを変化
革
考
N
会

Withコロナ時代が求める
「地域社会農業」

り止めている。土から離れて、活動を都市空間に集中することにより効率性・便宜性を高め、一方で画一化していると同時に、國のからの徹底した管理社会をつくり上げることによって、GDPに象徴される“豊かさ”を一極集中型から多極分離することで、分散をすすめていきことではないか。人と人の間で適正距離を保つことが必要とされると同時に、國のあり方も都市に集中して人口を農村に還流させることにより、東京の確保につながる農地の確保につながる農業的活動の特性を活かしていくものである。

させていくための国民皆農という方針の明確化、②都市から農村への人口還流、③地産地消の推進、④多様な扱いによる多様な農業の展開、⑤農業政策と地域政策・環境政策の一体化、⑥地域農業への取組振興、となる。これらについて若干補足しておけば、①は命、リアルに触れる農的活動を国民が持つ基本的権利とし位置づける。②は既に起こりつつある田園回帰の流れを加速していくため受け入れ条件の整備が必要となる。③は農作物にとどまらず人・モノ・金という地域資源を地域の中で極力循環させていくことが求められる。④は大規模農家の育成・確保だけでなく、小農・家族農業をも扱い手として明確に位置付け、少量多品種による生産をも重視していくことが必要となる。(5)はその中心となるのが有機農業を中心とした持続可能な農業を展開していくことである。⑥は(5)までの要素を包括し地域農業として振興・展開していくことになる。この到達点としての地域農業は「地域社会農業」と呼ぶにふさわしい。コロナは農業の変革をも迫っている。